

平成26年度 青少年育成運動活性化研究協議会

平成26年10月28日(火) かでる2・7(札幌市)

地域の青少年育成運動の活性化を図る

道内各地における青少年育成運動に取り組んでいる関係者やボランティアの方々を対象として、運動の現状や課題、今後の進め方について共通理解を深め、それぞれの地域における今後の青少年育成運動の活性化を図るために開催しています。当日は、基調講演と3つの分科会に分かれての研究協議を行いました。

基調 講演

演題「地域で子どもを育てる～アフタースクールの挑戦～」

特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール代表理事 平岩国泰 氏



過去・現代の放課後の状況

～過去の放課後～

- ・子どもは外で遊ぶもの、遊びの中心は『公園』
- ・駄菓子屋もあった(地域・大人とつながりが持てた)
- ・叱ってくれる大人がたくさんいた
- ・地域で子どもは育っていた

～現代の放課後～

- ・放課後は魔の時間帯→子どもの犯罪発生時間の7割が放課後
- ・誰もいない『公園』→『公園』はあぶないところ
- ・子ども達の居場所がない→都内では安全な場所を求める塾へ行く
- ・1人で放課後を過ごす→週3日以上1人で過ごす子が日本1位

【失われた3つの間】

- 時 間(楽しく緩やかだった放課後の時間)
- 空 間(たくさんあつた公園や空き地などの遊び場所)
- 仲 間(多くの仲間と遊べるような環境や時間)

小1・小4の壁

『小1の壁』

現代では、共働きの増加により小学校に上がるまでは保育園に預け、入学後は学童保育を利用するケースが多いが、公立の学童保育が不足し、仕事を辞めるか、民間学童保育を利用しないと子育てができないという現象が起きている。

『小4の壁』

学童保育の多くが小3まで、小4以降どうすればという親の悩みがある。今は小4・5でも1人で公園で遊べない世の中。高学年でも決まった安全な居場所がほしい、というのが親たちの声。

子育ての不安が先立つ社会

「小1・4の壁」は、少子化にもつながっている。内閣府の調査では、「子どもを増やさない理由」の1位は「子育てにお金がかかり過ぎる」、2位は「自分・配偶者が高齢」、3位は「子育てしながら働く環境がない」が挙げられ、子育ての『不安』が先立つ社会が浮き彫りになっている。

アフタースクール～日本の理想の放課後を求めて～

- アメリカのアフタースクールを参考にするとともに、日本の保護者たちの子どもに対する「コミュニケーションする力や、人の考えをちゃんと聞く力をつけてほしい。」や「多くの仲間、友達と多様な体験をしてほしい。」という願いを基に活動を開始。
- アフタースクールは、学校施設を活用した放課後の子どもたちの成長の場であり、安全で安心できる生活の場である。
- 子どもたちのやりたいことを叶えるため、スポーツや音楽、文化、食など様々なプログラムを実施している。先生役は、「市民先生」と呼ばれる地域に住む住民。それぞれの得意分野や専門性を生かした学びを提供してもらっている。

連携して社会や地域での子育てを形に

どんな子どもにも居場所があって、安心して楽しく過ごせる放課後の環境をつくりたい。子どもたちと地域社会とのつながりを復活させ、子どもも親も地域も元気になることを目指している。それぞれの地域でも皆さんが連携し、社会や地域で子どもを育てることを形にして、子どもたちを豊かに幸せに育ててほしい。

分科会

午後からは、3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿った提言や発表をもとに参加者による活発な話し合いが行われました。

●第1分科会 「青少年育成運動について考える」

～地域における推進指導員の活動と連携～(ワールドカフェ方式)

ファシリテーター：澤田慎也(北海道立生涯学習推進センターグループ主査)
助言者：濱口登代喜((公財)北海道青少年育成協会専務理事兼事務局長)



●第2分科会 「青少年の非行とスマホ、危険ドラッグの現状を知る」

～子どもたちを守るために大人ができること～

話題提供者：吉田崇文(北海道警察本部生活安全部少年課非行対策係長)
コーディネーター：一ノ関太郎(北海道教育庁石狩教育局社会教育主事)



●第3分科会 「青少年の体験活動・居場所・地域交流について」

～地域社会で子どもを育むために～

話題提供者：石井光郎(札幌市八軒中央地区青少年育成委員会会長)
助言者：平岩国泰(基調講演講師)
コーディネーター：宮坂豪(北海道教育庁空知教育局社会教育主事)

